編集後記

師走を迎え、今年一年を振り返った時、頭の中に思い浮かんだことばが二つある。一つは「日本語そのものが多文化である」、もう一つは「日本文化は正に変容」、いずれも自身の耳で聞いたものであるので、聞き誤っているところがあるかもしれない。前者は、八月に行われた都留国際文学祭での多和田葉子氏の発言である。多和田氏をはじめ、複数の言語での創作活動を続ける詩人たちによるシンポジウムでは、母語ではない言語で詩を書くことの意味や、創作や翻訳の中で見いだされる日本語の特性などが、ことばを紡ぎ出す詩人ならではの切り口で語られ、興味深い内容であった。「多言語、また多文化とは」という問いかけの中でなされた先述の発言は、改めて気づかされるものがあった。また後者は、本学科客員教授（今年度後期に就任）の冷泉為人氏のことばである。来年度に向けての打ち合わせの中で、日本文化がいかに多様なものを柔軟に取り込み、形を変えながら受け継がれているかについてお話を伺った。伝統文化の継承を何よりも身近なところで捉えている氏の発言もまた、多和田氏のことばに重なるところがあろう。

先の都留文科大学のように、日本語・日本文学研究における越境や国際化といった取り組みをしばしば目にするようになった。こうした取り組みがどのような方向に進むのか、様々な可能性があるが、試行錯誤を重ねていくといった現状であろう。一研究者としては、自身の研究や教育のあり方、意義を改めて問い直すと共に、土台となる研究の進展を図ることが責務である。この『日本文学紀要』では、古典文学四編、近代文学五編、全九編の研究成果を収めることができた。新旧交えた執筆陣の力作揃いで、寄稿してくださった先生方に改めて謝意を表したい。現役教員からの寄稿が些か少ないのは厳しい現状を映し出しているとも言えるが、こうした研究成果が、本学ならではの新たな取り組みに結びつくことを期待したい。最後に、この一冊の形にまとめ上げるためにご尽力いただいた編集室の方々に篤く御礼申し上げる。

（A・Y）

編集委員　山本　晶子
猪熊　雄治

学苑　九百二十七号

定　価　八六四円（本体八〇〇円）
購読料　一カ年分　一〇三六八円
（本体　九六〇〇円）

平成二十九年十二月二十日　印刷
平成三十年一月一日　発行

編集発行人　猪熊雄治
印刷所　三秀舎

発行所　昭和女子大学
近代文化研究所
〒154-8533
東京都世田谷区太子堂
一ノ七ノ五七
電話　03（三四一一）五三〇〇

☆掲載論文の無断転載を禁じます。